教職課程センター紀要　第６号　(25)-(29)ページ、二〇二一年一二月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.6 (25)-(29), 2021

論文

津留研究史への疑義二点―戦前日本民俗学における史料批判の欠如について

A critical study of a water dwellers village in Japan: Folkloric study before World War II

厚　香苗
Kanae ATSU

キーワード：少数者，海村調査，水上生活者，史料批判

一、本稿の目的

本稿では、日本民俗学の黎明期である一九一〇年代に、水上生活者の根拠地として研究者に見出された大分県臼杵市諏訪津留（以下では津留とする）の研究史を振り返り、二点の疑義を提出する。第一は、津留の人びとが元は民間宗教者であったとする、柳田國男の仮説に対する疑義である。第二は、研究者の聞き取りによると素朴に信じられていた情報の出処への疑義である。

先行研究および現地の伝承によれば、津留は瀬戸内海に浮かぶ船で暮らしていた「能地漁民」にルーツをもつ集落のようである〔厚二〇〇九〕。しかし漁業経済学者の羽原又吉は、研究の進展によって、津留は能地系の集落ではなく、独立した一派と認められる可能性があるとした〔羽原一九六三〕。羽原がこの考えを述べた当時、津留の人びとの主たる生業が漁業ではなく、女性の行商であることが知られていた〔瀬川一九三八-一九三九〕。津留は交易、能地は漁業の集落ゆえ、羽原は両者が同系統か疑ったと筆者は推測している。いずれにせよアジアの「漂海民」研究の第一人者だった羽原を悩ませるほど、津留の生活と伝承は人文社会学者にとって魅力的だった。それは民俗学者にとっても同様で、津留は、柳田國男が主導した日本民俗学史上初の海辺の集落調査である「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の研究」（一九三七-一九三九年。通称「海村調査」）の調査地にも選ばれている。

津留の研究史は柳田國男が主宰する雑誌『郷土研究』に一九一五年に四篇、一九一六年に一篇、シャ（シャア、シヤア、シャーとも記述される）の論考が発表されたことに始まる。シャとは津留の人びとをいう他称で、やや侮蔑的なニュアンスをもち、自称としては使われてこなかったようである（注一）。かつての津留は移動的な生活をする人びとがつくった集落ゆえに、漁村を含む周辺の定住村とは文化が異なり、近隣集落の人びとから「外国のよう」とさえ言われた（注二）。さまざまな表現で語られる津留の個性は、平家落人にルーツをもつが故であると伝える津留の人びとの誇りである一方、近隣集落と違う発音の癖などは異質視の要因になることもあった。一八七五年に津留の民家で開校した創立諏訪学校（現臼杵市立海辺小学校）には、津留を含む諏訪地区と、近隣の漁村である大浜、中津浦の子ども約三〇人が通いはじめた（注三）。しかし大正期になっても津留の子どもたちの就学率は低かった（注四）。だが次第に就学率は上がり、それとともに集落ごとの個性は薄れていった。やがて、高度経済成長期以後になると、「伝統的な生活」は見えなくなり、研究者の関心は津留から離れていった。そして、柳田が一九一五年に「シャ研究」の嚆矢として提出した仮説は、検証されないままになっている。

筆者が二〇〇八年から断続的に実施しているフィールドワークによれば、後述

する柳田の「民間宗教者仮説」はおろか、津留を訪ねた研究者も津留の人びとには記憶されていない（注五）。「津留の歴史」として現地で伝えられているのは、盆歌（クドキといわれる）で七七調の叙事歌謡である「津留物語」〔厚二〇〇九〕と、行政文書の控らしき『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』のコピー〔厚二〇一〇〕である（注六）。「津留物語」は毎年八月に先祖供養のための盆踊りで謡われるため、津留の人の耳に馴染んでいるオーラルヒストリーとしての「村の歴史」である。『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』の方は対外的に作られたオフィシャルな「村の歴史」で、集落の一部の人がコピーを伝えている。どちらも平家落人の集落としての津留の歴史性を説くところから始まっており、かつて津留の人びとは民間宗教者であったとする柳田仮説との接点はない。このような齟齬が生じている背景には、戦前日本民俗学における史料批判の欠如がある。

二、柳田國男の民間宗教者仮説の検討

津留が平家の車を守る役を担った人びとの子孫の集落であることは、近世期の随筆集である「関秘録」にみえるが短い記述である。詳細な津留の習俗の記録としては、成城大学柳田文庫の「海部記事」（諸国叢書九、出版者不明一九一一年）が最古である。『郷土研究』の論考より先に「海部記事」は成立していた。柳田が「海部記事」を入手した経緯と時期はわかっていない。この資料の名称は、柳田文庫の目録には「海部記事」とあるが、現物には「特殊部落調査」とある。柳田は元の資料名を無視して、自分の蔵書にする際に「海部記事」に資料名を変更したらしい。少数者の生活に関心をもっていた一九一〇年代の若き柳田は、津留の事例を「特殊部落の特殊な事例」として扱うことに慎重だった。

『郷土研究』に掲載された五篇の論考のうち、最も早く『郷土研究』に掲載されたのは柳田國男「護法童子（毛坊主考の十）」である。民間宗教者を扱うこの論考で、柳田は津留の人びとについて「関秘録」を根拠として次のように述べた。

「豊後の海辺に魚売などをして暮らす者に事捨（じしや）てふ部落のあったことは、関秘録巻五に出て居る。百姓賤しみて之と通婚交際せず、俗には之をシヤアとも呼ぶ。安徳天皇御入水の時に乗捨てたまひし車を打砕き薪とせしより、如何に御運拙くとも天孫にてわたらせたまふに、無下なることをしたと弾指せられ、自然と其黨きりの者となつたと云ふのは奇抜な話である。車と云ふのは多分はシヤアと云ふ稱呼から言ひ始めた説明で、是亦昔の貴人を引合に出す通例の癖を発揮したものである。此仲間のやうに零落しては、原の形を探るのに難いが、幸にして多くの地者は、其職業乃至は生活から昔は名実とも侍者であったことを證して居る。」

柳田は事捨に「じしや」と仮名を振り、民間宗教者「侍者」へと連想をつなげ、侍者が零落した姿をシャアと言われていた津留の人びとに重ねている。「関秘録」は柳田文庫に入っておらず、柳田は内閣文庫本を参照した可能性が高い（注七）。内閣文庫には「関秘録」の写本が三点所蔵されている（請求番号二一一-〇二九〇、二一一-〇二九一、二一一-〇二九二）。二一一-〇二九一は巻五を欠くため、二一一-〇二九〇と二一一-〇二九二の巻五を確認すると、たしかに津留に関する記述はあるが、二点の資料のどちらも柳田が引用した「事捨」ではなく「車捨」となっている。車捨はジシャとは読めない。二一一-〇二九〇では目録に「車捨」とあり、「捨」の右には「ステ」と仮名が振られている。本文も「車捨」で振り仮名はない。柳田が内閣文庫本を参照していたならば、事捨＝侍者仮説は成立しない。

柳田は『郷土研究』に掲載される論考をコントロールできる立場にあったし、地方から『郷土研究』に寄せられた投稿論文や事例報告を元に、「日本民俗学」を作り上げようという使命感をもっていた。したがって寄せられた投稿論文を読んだうえで、初期柳田の代表的な論考である「毛坊主考」の一部を仕上げ、投稿論文より先に『郷土研究』に掲載した可能性がある。この点を検討する史料は残されていないが、毛坊主考で示された津留に関する仮説は、「関秘録」だけでなく、『郷土研究』に投稿された論文の影響を受けた可能性があることは指摘しておきたい。

三、『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』の影響

盆歌（津留ではクドキという）の一つである「津留物語」は基本的には口頭伝承による叙事歌謡で、「口説く人」といわれる集落の「のど自慢」たちが自筆で私的なメモを作って伝承してきた。そのメモは口説く人自身のための備忘録である。一方、『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』のコピーは、オフィシャルな村の歴史を語る資料と捉えられているように見受けられる〔厚二〇〇九〕。『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』が作成された経緯と年代は不明である。この資料の影響が地理学者の吉田敬市の論考〔吉田一九三〇a、b、c〕と、民俗学者の瀬川清子が記入した「海村調査」の際の採集手帖〔瀬川一九三八-一九三九〕にみられる。

吉田の論考には水上氏という大分県職員が「津留部落の研究者で同氏の手によって風俗習慣等の一斑（ママ）に就て記録されたものがあり、大いに豫備知識を得る事が

出来視察上非常に有効であった」〔吉田一九三〇ａ〕とある。吉田が見た記録の一つが『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』であったらしく、『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』二と、〔吉田一九三〇ｃ〕九の章立てと内容が類似している（図一）。資料名と目次から、当時の津留に見られた問題とその改善方法を検討することがこの文書の主目的であることは明白で、吉田が注目した部分についても、中立的な記述というよりは、問題点に着目していると考えられる。

図一　「北海邊郡海邊村津留部落改良計画書」目次

沿革
一、津留部落ノ起源
二、人情風俗
（一）結婚式
（二）女尊男卑ノ風
（三）婦人ノ生活資料
（四）諸事ヲ隠蔽スルノ風習
（五）迷信ニ依レル奇風
（六）偏狭的自負心
三、衛生状態
四、納税成績
五、経済状態
六、教育状況
七、其他雑感
沿革施設事業ニ就テ
従来施設セル事業ト失敗ノ原因
一、滞納整理
二、義務教育奨励
三、勤勉貯蓄ノ奨励
新事業施設計画
甲、既設事業ノ部
一、貯金組合設置
二、衛生組合ノ復興
三、滞納整理
乙、計画事業之部
一、就学児童収容所設置
二、信用組合設置

この部分が民俗調査報告のように読まれてきたか？

〔吉田一九三〇ｃ〕の目次の一部
九、人情風俗、習慣
Ａ風俗　Ｂ結婚式　Ｃ言語　Ｄ女尊男卑の風　Ｅ諸事を隠蔽する風習　Ｆ迷信　Ｇ祈祷巫女
結び

『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』の作成者と伝わる村長の名は、瀬川の採集手帖の「走り祝言」の記述にもみえる。「走り祝言」は、新郎の家と新婦の家の間を、新郎と新郎と同じ格好をした友人、新婦と新婦と同じ格好をした友人が走り抜け、そこに衆人が汚物を投げつけるという、かつての津留にあった独特の婚礼習俗である。

この婚姻習俗について、瀬川の「採集手帖」をみると、記述の大半は漢字とひらがな交じりの文章なのに、「走り祝言」の部分は漢字とカタカナ書きで、その末尾に丸カッコ入りの人名がある。「走り祝言」の部分は、ほかの部分と明らかに書き分けられている。漢字とひらがなの部分は瀬川自身の「聞き書き」、漢字とカタカナの部分は何らかの資料からの書き写しと考えてよかろう。カタカナの部分が『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』とほぼ同じ内容である。

四、結び

本稿では、津留の人びとが元民間宗教者であったとする柳田國男の仮説は、不十分な史料批判によること、従来、素朴に「聞き書き」によると考えられてきた報告は、津留の問題点を書き連ねた行政文書の影響を受けていること、この二点を確認した。「よそ者」としての調査者が、現地の有力者から資料提供を受けた場合、その資料を完全に無視することはできないものである。瀬川が津留を訪ねた一九三八年は国家総動員法が制定された年である。女性ゆえに戦争に行かずに民俗調査を続けることができた瀬川は、立ち寄る場所で、たびたびスパイ容疑を掛けられた〔瀬川一九七一〕。聞き取り調査が実施しにくい世相であったが、それでも瀬川は自著で「走り祝言」に言及する際には、「実際は腹が太っているので「余り走るな」と注意する」と、『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』にはない情報を加筆している〔瀬川二〇〇六（一九五七）〕。瀬川が調査員として津留を訪ねた海村調査は、柳田仮説を検証する絶好の機会であった。その調査も『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』の影響を受けた。これは時代背景を考慮すれば仕方がない。

筆者が出会った、「走り祝言」を記憶する人のなかには、新婦が婚家に落ち着くようにとの願いが込められた習俗だったと、「走り祝言」を好意的に説明する人もいた。だが大方の津留の人びとにとっては、「触れられたくない遠い過去」のようで、話はほとんど聞けない。しかしその事実も含めて生活史の一幕である。津留は幸か不幸か、研究者に「発見」された時期が早かった為に、豊富な事例報告が残っ

た。研究者は報告をするならば、その報告が刺激的であれば余計に、慎重に学術的な解釈をする義務があろう。

フランスの民俗学者アルノルト・ファン・ヘネップの『通過儀礼』（一九〇八年）は、儀礼研究に初めて一つの理論的体系を与えたと評される著作である。この著作では、人生の節目に行われる通過儀礼は、分離期→過渡期→統合期のプロセスをたどり、不安定な境界状況の過渡期には、非日常的な行為が行われると論じられた〔ファン・ヘネップ二〇一二（一九〇八）〕。ヘネップの議論に引き付けて「走り祝言」を解釈すると、若者の婚礼が整う直前という、おそらくは人生に一度の不安定な過渡期の儀礼が「走り祝言」だと説明できる。津留の人々は日常的に若者に汚物を投げつけていたわけではない。

日本民俗学の黎明期に限られた情報から出された仮説でも、著名な研究者の文章は後世に残り続ける。フィールドワークの困難さと、困難でも継続することの重要性、そして現地へ研究成果を還元し、議論を深めることの大切さを津留の研究史は示している。

≪注≫

注一　筆者のフィールドワークによる。人権教育の浸透によって特定の集落の人びとという民俗語彙は表向きでは使われないようになっているが、シャアという語を理解できる人は臼杵市周辺では年齢、性別、居住集落を問わず少なくない。それゆえ研究史を踏まえて学術的な解釈を加える今日的な意義がある。

注二　ある女性（故人）は、津留の人は昔「言葉ができなかった」という表現で、学校教育によって津留の言葉が標準語に修正されたことを語った。

注三　臼杵市立海辺小学校ホームページ（「学校のあゆみ」http://syou.oita-ed.jp/usuki/amabe/history/history.html　二〇二一年四月二七日アクセス）

注四　『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』には「大正五年度ニ於テ已ニ百六拾人ノ不就學者ヲ出シ是等多數ノ児童ハ終ニ目ニ一丁字ヲ解スルニ至ラスシテ不遇ノ生涯ヲ終ラントス」とある。「目に一丁字ない」とは、黎明期の日本民俗学が研究対象とみなした、字を解さぬ庶民の典型的な表現で、民俗学者の間では、しばしば肯定的に使われた。たとえば柳田國男は、一九三二年に山形県郷土研究会でおこなった講演「郷土研究と郷土教育」で、従来からの村の教育では「教員は目に一丁字なきちょん髷の故老であり、教科書は胸に描く印象と記憶とではあったけれども」青年は多くを学んだ。それこそが国民の教育としての郷土教育だとして、文部省の唱える「新たに追加しなければならぬ」郷土教育を批判している〔柳田一九九〇（一九三三）〕。

注五　津留を訪ねた研究者と訪問年（丸カッコ内）は以下の通りである。吉田敬市（一九三〇年）、桜田勝徳（一九三四年）、瀬川清子（一九三八・三九年）、宮本常一（一九四七年）、厚香苗（二〇〇八年二・八月、二〇一一年、二〇一三年五・八月、二〇一四年三・八月、二〇一八年）。柳田國男の訪問記録はないが、『海南小記』の元となる南島旅行の際、臼杵市周辺を通過して津留の話を聞いている〔柳田一九八九（一九二五）〕。

注六　筆者が披見したコピー機で複写した複写物には、複写である旨がコピー元の所有者のものらしき筆跡で加筆されていた。つまり披見した資料は少なくとも原本から二回コピーを重ねていた。原本の所有者および作成者は定かでないが、かつて津留でコレラが大流行した際に、トリアージをおこなった村長だという人がある。移動的な生活をしていた能地漁民等の伝える由緒書の作成・写し・破棄と伝承の関連については別の機会に論じる。なお津留にルーツをもつ人が書いた自集落の歴史としては、かつての津留区長、日高登氏によるものが詳細で、文献の引用だけでなく集落における口伝にも言及している〔記念事業実行委員会一九七八〕。

注七　福田アジオ氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）の教示による。

謝辞

西郊民俗談話会第六七〇回（二〇〇七年七月一五日）における大島建彦氏（東洋大学名誉教授）「大分県坂ノ市の万弘寺の市」の発表とその後のディスカッションに刺激されて筆者は津留を訪ねるようになった。研究の契機を下さった大島氏に御礼を申し上げる。記録はないが大島氏も津留を訪れている。

≪参考文献≫

厚香苗二〇〇九「『北海邊郡海邊村津留部落改良計劃書』解題・翻刻」（『日本学』二八東国大学校文化学術院日本学研究所）

厚香苗二〇一〇「先祖に口説く村の歴史―大分県臼杵市諏訪津留の叙事歌謡」（谷口貢、鈴木明子編『民俗文化の探究』岩田書院）

伊東東一九一五「豊後シヤア村の事ども」『郷土研究』三-八郷土研究社

川田順造二〇一二「最初期の柳田を讃える」（『現代思想』二〇一二年一〇月臨時増刊号青土社）
喜田貞吉一九一五「シャと海部」『郷土研究』三-二郷土研究社
喜田貞吉一九一六「豊後シャア部落民赤色を好むという事に就いて」『郷土研究』三-一〇郷土研究社
記念事業実行委員会一九七八『臼杵市立海辺小学校　開校百周年記念誌〔非売品〕』臼杵市立海辺小学校
桜田勝徳一九五四「豊後の津留」『民間伝承』一八-一二　六人社（再録：桜田勝徳一九八二『桜田勝徳著作集』七）
瀬川清子一九三八-一九三九「採集手帖（沿海地方用）」（瀬川清子研究会二〇一四 DVD 岩田書院）
瀬川清子二〇〇六（一九五七）『婚姻覚書』講談社
瀬川清子一九七一『販女―女性と商業』未来社
土居暁風一九一五「豊後のシヤ」『郷土研究』三-六郷土研究社
羽原又吉一九六三『漂海民』岩波書店
広島県教育委員会編一九七〇『家船民俗資料緊急調査報告書』広島県教育委員会
ファン・ヘネップ（綾部恒雄　綾部裕子訳）二〇一一（一九〇八）『通過儀礼』岩波書店
福田アジオ一九九二『柳田国男の民俗学』吉川弘文館
福田アジオ一九九三「民俗学と子ども研究―その学史的素描」（『国立歴史民俗博物館研究報告』五四国立歴史民俗博物館）
宮本常一（田村善次郎編）一九八六『宮本常一著作集三二村の旧家と村落組織Ⅰ』未来社
柳田國男一九九〇（一九三三）「郷土研究と郷土教育」（『柳田國男全集』二六筑摩書房）
柳田國男一九一五「護法童子（毛坊主考の十）」『郷土研究』二-一一郷土研究社
柳田國男（酒井卯作編）二〇〇九（一九二〇-一九二一）『南島旅行見聞記』森話社
柳田國男一九八九（一九二五）『海南小記』（『柳田國男全集』一筑摩書房）
吉田敬市一九三〇ａ「家舟的聚落の生活を見る（上）」『歴史と地理』二五-四星野書店
吉田敬市一九三〇ｂ「家舟的聚落の生活を見る（中）」『歴史と地理』二五-五星野書店
吉田敬市一九三〇ｃ「家舟的聚落の生活を見る（下）」『歴史と地理』二五-六星野書店